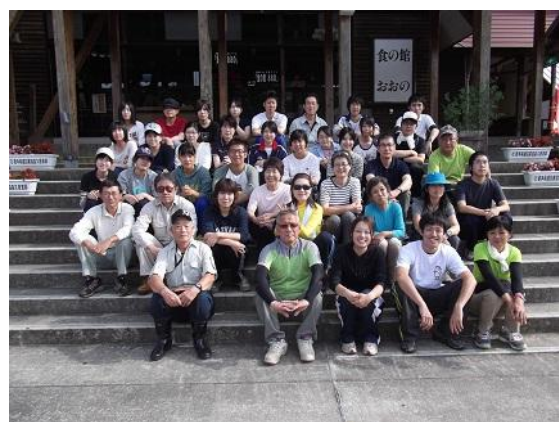


野田村支援・交流活動報告（2011年8月10日）

前夜の天気予報によれば、野田村の予想最高気温は32度。実際には34度で、ボランティア活動は照りつける太陽との戦いとなりました。前週はねぶた祭り（弘前大学人文学部ボランティアセンターで野田村マスコット「のんちゃん」ねぶたを作成、運行）でバスを運行できず、やや久しぶりのボランティア活動でした。夏休みに入り、これまで講義等で都合のつかなかった弘前大学学生のほか、高校生3名の参加があり、学生の人数が社会人を上回りました（学生22、社会人15、教員4の計41名）。約半数は初参加者だったため、若干詳しく野田村の被災状況やこれまでのボランティア活動の経緯などをお伝えしました。



前週に活躍した「のんちゃん」ねぶた



道の駅「おおの」前での集合写真

9時に野田村へ到着。すでに30度超の暑さでした。当日60歳の誕生日をめでたく迎えられるピーター・自称「善良なる市民」清藤さんのリードによる準備体操後、現地社協の災害復興ボランティアセンターの指示で、村役場から徒歩10分ほどの個人所有の広大な畑の瓦礫・ごみ撤去と草とりを行いました。同センターブログの当日の記載によれば、震災ボランティアは57名で、団体は我々のみだった模様です（ブログのアドレスは下記）。

<http://blog.canpan.info/nodashakyo-vc>

現場で待っておられたボランティア依頼主の方のオーダーは、畑に重機が入り大きな瓦礫は撤去されたものの、地中に細かい瓦礫やごみが入り込んでいるため、地表の目につく異物を取り除いて欲しいというもの。近所の方からその土地を借りて農作物を作りたいという要望が寄せられているため、震災前の農業のできる土壌に戻したいとのことでした。

2班に分かれて活動を開始。重機とボランティアがすでに入っているだけあり、いわゆる瓦礫らしい瓦礫（私の経験では、皿、ガラス、本、ビデオテープなどの生活用品やガードレール（!）など）の撤去というよりは、比較的小さな木片や草を拾い上げるという、半ば草むしりのようなこれまでにない作業で、20-30分ごとに休憩を挟み、近くの空き家の庇の下に避難して水分補給に努めました。土の中には、小さな虫が蠢いていました。また、生徒手帳が出てきたので、後で現地のセンターに届けました。さえぎるものがない日差しの下にただで、汗でマスクや軍手が湿り、そのうえ体を動かすのはなかなか大変で、隣家の方に家の前の水道を自由に使って良いとお申し出いただいたことは助かりました。



瓦礫撤去作業



津波で流入した石の拾い出し

昼食は、このところ恒例の「かまどのつきや」（築 50 年以上の古民家）で、おにぎりとおかずの手作り弁当、豆腐汁の他、今回はトマトサラダとあんこ餅をいただきました（米田様のご厚意による提供で、弘前大学後援会の資金より心ばかりの謝礼をお支払いしています）。あんこ餅作りはボランティアも手伝い、食べきれないほどの量ができました。初参加のボランティアの方々にとって、落ち着く畳の室内で提供される美味しい昼食の数々は嬉しいサプライズだったようで、「作業の良い息抜きになった」と大変好評でした。



あんこ餅作り



昼食風景（手前右にあんこ餅）

午後はいっそう日差しが強くなり、背中がじりじりと焦げつく感覚に襲われるほどで、日焼け止めクリームを持参を呼びかけておけば良かったと自戒を込めて思われました（顔や首が実際に黒くなりました）。作業は、雑草を瓦礫ごと掘り起こす係（主に男性）と、それらを積み上げる係（主に女性）に分かれ、1 班と 2 班で交代してあたり（片方の班の作業中に他方の班が休憩）、午前中よりも効率良く進んだように思われます。もっとも、熱中症で具合の悪くなる人が出ないように、いつもよりもこまめに休憩を挟み、また畑の面積が広大だったため、すべての瓦礫・草木を一日で取り除くまでにはいたりませんでした。



瓦礫撤去兼草むしり



むしった草木の山

途中で隣家のご夫婦よりアイスの差し入れがあり、ありがたく頂戴しました。私たち全員に行き渡るほどの数があり、わざわざ購入して下さったようで大変恐縮しました。その隣家の方と途中から顔を出された依頼主の方と立ち話をさせていただいたところ、重機による撤去作業の場合は瓦礫が地面に埋もれて残ってしまうところ、人の手による震災ボランティアは細かく丁寧に作業してくれるので大変助かっているとのことでした。ボランティア学生は遠方に住まわれるご子息と重ねて映るようで、目を細めて眺めておられました。



いただいたアイスでほっと一息



作業後の風景（奥の畑）

震災被害については、瓦礫の流入の他に、住居に浸水の被害があり、修繕されていて気付きませんでした。よく見ると1階部分の天井近くまで浸水の跡がありました。1階の窓ガラスは張り替えたとのことでした。近隣の方々は、山の方に避難してご無事だったようですが、耕運機は塩水に浸って使い物にならなくなり、自家用車は購入したばかりにもかかわらず流されたと嘆いておられました。また、浸水した1階の食器棚は、いくら表面を拭き取っても包丁を置くと内部の塩分が浸み出して錆びてしまうというお話で、震災後5ヶ月経つにもかかわらず持続する津波の脅威を実感させられました。弘前には桜の季節に何度か訪問され、知人は先日のねぶた祭りに招待されたとのこと、月末の野田村復興イベントで「のんちゃん」ねぶたを運行する旨をお伝えすると大変喜んでおられました。

作業後は、着替えてさっぱりした後、初参加者が多かったこともあり海岸近くで破断した堤防などを見学して被災状況に触れ、帰りの道中、「陸中野田駅」の野田塩ソフトや「道の駅おおの」のアイスに適宜楽しみました。参加者から車中で語られた感想では、今回の作業はいつもの瓦礫撤去とは違う半ば草取りで野田村が復興に向かいつつあることを実感した、今回の依頼主の方はやや遠慮されているようだったが今後もニーズがあればあの畑で農業が再開できるまで支援を続けていきたい、津波で洗われた地面に草が生い茂り蟻や芋虫などがいて自然と命の強さを感じた、暑かったけれど参加者同士で教えあい会話しながら楽しく作業できた、また都合があれば参加したい、家族に経験を伝えたい、といった声のほか、草鎌があれば良かった、作業時間が短くて残念だった、との意見もありました。



海岸沿いの風景



陸中野田駅で野田塩ソフトを求める人の列

野田村災害復興ボランティアセンターは、この 8 月以降、土日は休業となっています。弘前市からのバス運行資金の援助は、いつまで続くか不透明な状況にあります。他方、野田村は復興に向かいつつあるところ、現地のボランティアニーズは潜在的なものを含めてなお存在するように見受けられます。今後は、ボランティアニーズ（掘り起こしを含む）への対応と、平日にボランティアをいかにして集めるかが、課題になると思われます。

今回は一月ぶり 5 回目の参加でしたが、チームオール弘前の週一ボランティアバス運行は 18 回目を数え、学生事務局（今回は理工学部 4 年の南部君と目黒さん）によるバス車内の司会進行、自己紹介、休憩所の写真撮影、担当教員による注意事項の説明、準備体操、米田さんのご厚意による昼食、休憩所での買い物、感想、アンケート、行き帰りの歌や、阿保さんのご厚意による塩・梅あめの配布やユニフォーム洗濯など、関係者とリピーターのご協力を得て、回を重ねるごとに完成度を高めて運営されてきたことが実感されました。

この 5 ヶ月間の経過を振り返ると、6 月の活動報告会、7 月の野田村支援のあり方をめぐるワークショップの開催や、8 月の「のんちゃん」ねぷたの作成・運行を含めて、見知らぬ教員、市民、学生同士で自然発生的に無償で行われてきたとは信じ難いものがあります。被災地のニーズに対応した実効性ある支援・交流を、弘前市（と近隣地域）の学生、市民の善意を活かして実現し、参加者が引き続き無理なく健康で楽しくボランティア活動に従事できるよう、資金面を含む運営スタイルの必要なさらなる改善が期待されるところです。

（担当 飯考行）